

2009年12月14日

札幌市長 上田 文雄 様

(社) 北海道自然保護協会
会長 佐藤 謙

**「藻岩山魅力アップ施設再整備」とくに山頂エリアの
抜本的再検討を求める緊急要望書**

このことについて、当協会は10月22日に札幌市長あて計画の抜本的再検討を求める要望書を提出し、11月12日には賛同する団体が共同して「市民みんなで考えよう あすの藻岩山」の緊急集会を札幌市内で開催、さらに11月25日には当協会が関連する質問書を市長あて提出しました。

その過程において、札幌市の担当部局の方々から計画内容のご説明をいただき、また12月4日には質問書に対する回答書をいただきました。さらに12月7日にはお忙しい最中にもかかわらず上田文雄市長に直接、私たちの考えをお伝えし、それに対する市長のお考えを承る機会を得ることができました。このようにいろいろご配慮いただいたことに感謝し、お礼を申し上げます。ありがとうございました。

12月7日、市長からは山頂展望台の問題点に関し、「中腹エリアのロープウェイ山頂駅付近にレストランや売店を入れる検討はしてこなかったもので、これから検討したい」という趣旨のご発言がありました。また、12月8日づけ北海道新聞朝刊の「藻岩山／再整備計画修正へ／札幌市長・展望台の規模縮小」という記事によれば、「展望台の規模を縮小する案を軸に、年内に新たな計画をまとめる」とあり、12月12日の同新聞には「藻岩山再整備 市が修正案検討／歩み寄りで決着なるか」という報道がなされております。

したがって12月4日づけ回答書および7日の市長のご発言などを踏まえ、私たちがいままで意思表示してきた要望内容のうち最重要事項を、あらためて下記3項目に整理しましたので、「新たな計画」ではこの3項目が実現できるよう、特段のご配慮をいただけますようお願い申し上げます。

- 1 山頂展望台計画からレストラン・売店を除外すること
- 2 山頂からの360度の眺望景観を快適にするために、分節構造は採用せず、風致に支障の少ない建築デザインを考慮すること
- 3 山頂展望台は現存展望台の規模より縮小させること

なお、いままで当協会では言及しなかったのですが、山頂展望台の規模縮小に伴い、かつてのリフト等に代わるモノレールは下記4のような扱いにすることが望ましいと考えますので、併せて特段のご配慮をいただけますよう、お願い申し上げます。

- 4 山頂モノレールの原案は大量輸送を前提としているが、展望台の規模縮小とのバランスを考慮し、現状の輸送方法を再評価すること

記

最重要の要望3項目等・補足説明

以下の文章では「藻岩山魅力アップ構想施設再整備基本設計」の案を「原案」、年内に検討する新たな計画を「新案」、12月4日の回答書を「回答」とする。

1 山頂展望台計画からレストラン・売店を除外すること

山頂展望台の原案が大規模化した最大の要因は、収益施設であるレストラン・売店の肥大化にあることが明白であり、かつこれらの施設が山頂になければならない必然性についての質問（2-（1））に対する「回答」は、「多様な求めに応じる」とあるだけで必然性は回答もれ、すなわち山頂にある必然性がないので、少なくともレストラン・売店を原案から除外し、中腹エリア（ロープウェイ山頂駅付近）へ移すこと。

なおレストラン・売店を山頂展望台から除外することは、次の問題点の解消・軽減にも寄与するので、レストラン・売店を除外すべきである。

①公共性を重視すべき山頂でエコロジーよりエコノミーを重視することがなぜ適正なのかという質問（2-（2））に対する「回答」では、「公共的施設と考える」とあるが、これは基本計画で「収益的施設」と明確に位置づけられた範囲内の「公共」で説得力がなく、エコロジーよりエコノミーを重視することが適正であることを立証することは回答もれ、すなわち立証できなかったため、山頂でエコロジーよりエコノミーを重視することは不適正であること。

②アイヌ民族が「神聖な山」とする藻岩山の山頂にレストラン・売店を建設することへの質問（3-（1））に対する回答では、「アイヌの人々の自発的意思」の反映が回答もれ、すなわちアイヌの自発的意思が反映されておらず、「アイヌの歴史・文化の尊重」は現に市長との懇談会に出席したアイヌ民族代表から異議が申し立てられている。したがって山頂のレストラン・売店はアイヌ文化振興法に定める「地方公共団体の責務」（第3条）および「施策における配慮」（第4条）に反する施策であること。

なお藻岩山頂に崇敬の念を抱く札幌市民は多く、それらの人々の間から「山頂に大型建築物を建て、そこで飲食やショッピングを楽しむ行動は自然を尊ぶ心を忘れた人間のおごり」との批判が起こっているため、山頂での飲食やショッピングを楽しませる「自然を尊ぶ心を忘れた」ような行政施策は講じるべきではないこと。

2 山頂からの360度の眺望景観を快適にするために、分節構造は採用せず、風致に支障の少ない建築デザインを考慮すること

山頂展望台の原案では、屋上部分の中央近くに「札幌展望回廊」が設けられている。藻岩山頂からの眺望は俯瞰を特徴とし、ほぼ水平の遠景、水平より下向きの中景・近景が絶妙に組み合わせられて味わいと深みのある眺望が構成されるにもかかわらず、「札幌展望回廊」は中央部に設けられたため、水平方向の遠景は見えても、下向きの中景・近景を眺望することができず、「展望回廊」の機能を発揮できない非現実的な原案となっている。

俯瞰の眺望を360度にわたって楽しむためには、展望台の中央部ではなく周縁部をひと回りする必要があるが、山頂展望台の原案では施設が大規模化し、建物を小さく見せる分節構造を採用しているため、分節構造は必然的に眺望景観もこまぎれに分節し、藻岩山頂の最大の魅力である360度にわたって連続する眺望景観を阻害する結果になっている。

したがって新案では分節構造をとり止め、連続的な360度の眺望景観を楽しめるよう、凹凸のないシンプルな平面形（例えば円形）の屋上とすること。

なお山頂展望台の原案では眺望を確保するため壁面にガラスが多用されているが、ガラスの多用は野鳥の衝突死・衝突事故を多発させる懸念があるので、バードストライク対策を十分に講じること。さらに、建築物の外観は風致上の支障を軽減するため、周辺の自然環境となじみ易い材料・色彩とすること。

3 山頂展望台は現存展望台より小規模化すること

新案で山頂展望台を規模縮小する場合は、『藻岩山魅力アップのために』の懇談会報告（2005）で指摘された、「山頂に施設があることで山の頂の感じがしない」「山頂に展望台施設があるため、ふもとから見たときに山頂の景観が悪い」という問題点、すなわち藻岩山頂には施設がないことが望ましいという指摘に対し、その問題点を少しでも軽減させるため、新案の山頂展望台の規模は現存展望台より小規模化すること。

なお前記1にも関連するが、山頂でなければ充足できない機能、すなわち山頂にある必然性を有するものは「展望」機能が唯一のものなので、山頂展望台は展望を充足させるために必要なものに特化し、原案にある「山頂展望台に多様なアクティビティ」を導入するコンセプトは否定されること。

4 山頂モノレールの原案は大量輸送を前提としているが、展望台の規模縮小とのバランスを考慮し、現状の輸送方法を再評価すること

中腹エリアのロープウェイ山頂駅から山頂へのアプローチは、徒歩以外には、数年前までリフトがあり、現在は夏期に自動車、冬期には雪上車によっている。このリフト跡地にモノレールが計画され、それがCO₂削減に効果があるとされている。しかし、①モノレール計画は、現状輸送システムの自動車・雪上車との比較だけではなく、その建設と維持のためのエネルギーが新たなCO₂排出として換算できるため、CO₂削減効果があるとは明言できないこと、逆に、モノレール関連施設は財政が厳しい中で約1億円の建設費を拠出するだけではなく山頂エリアの自然環境に新たな負荷を与えること、②山頂展望台の縮小に伴い、大量輸送を前提としたモノレール計画はむしろ観光客を展望台に殺到させ混乱を引き起こすこと、そしてレストラン・売店が中腹エリアに移転されるならば、むしろ中腹エリアで大量観光客の長時間滞在が期待されること、これらの変化が予測されるので、現状システムで登る人程度の人数におさえた方が山頂でゆっくりと展望を楽しめると考えられること、したがって、③大量輸送を前提としたモノレールの導入をひかえ、現状の輸送システムを再評価すること。